

高齢者の苦悩和らげ

臨床宗教師 特養で心のケア

「空気のような存在に」

介護を必要とする高齢者ならではの苦悩に寄り添う僧侶が、大阪府茨木市の特別養護老人ホーム「常清の里」で働いている。龍谷大大学院が養成した「臨床宗教師」の1期生、柱本尊さん(27)。肩書は生活相談員だが、主に行うのは傾聴だ。認知症などで心を閉ざした高齢者が奥底に秘めるつらさを、布教とは一線を画した活動で和らげている。(小野木康雄)

「自殺したい」

「私だけ寂しい。ダメ人間やねん。どうしたら良いもんやろっ」
 9月15日、ソファに座っていた入居者の女性(97)が柱本さんを呼び止め、そう語り始めた。
 「自分が怖くて、どうにもやりきれない。自殺したい。だれかにすがりたい」
 じっと耳を傾げる柱本さん。隣に腰かけ、しわだらけのか細い手を握って相づちを打つ。「何か、すがりたい物がありますか？」
 すると女性は、面会に来てくれない子供たちのこと



特別養護老人ホームの入居者とテレビを見る臨床宗教師の柱本尊さん(左)。「必要なときに求められたい」と話す
 —大阪府茨木市の「常清の里」

を嘆き、意外な悩みを打ち明けた。
 「私がこういう性格だから、うっとうしくて嫌われているのかな。もうちょっと明らかで人を楽しませる人間になりたい」。約30分間の会話。最後に女性は「お話しできてよかったです。ありがと」と話した。

ともに悩む

僧侶として、神仏にすがればいいと女性を導く方法もあった。しかし柱本さんは、安易な答えを与えるよりも、話を引き出してともに悩むことを選んだ。
 苦悩は思わぬきっかけで

施設内で帽子をかぶっていた男性に、柱本さんは何げなく、何の帽子かと尋ねた。男性は、働き盛りの40

表に出ている。

施設側「見習うべき点多い」

柱本さんを雇用する施設側は、臨床宗教師の活動をどうとらえているのか。

特養「常清の里」を運営する社会福祉法人「慶徳会」は、浄土真宗本願寺派の寺院住職が昭和6年に開設した慶徳期の託児所が母体。大和治文理事長(75)は「宗教性を忌避するのでなく、人が生き方を考えるツールとして活用すべきだ」と指摘する。
 入居者には他宗派の仏教徒やキリスト

会話を記録

臨床宗教師は、布教や宗教勧誘を行わず、苦悩や悲嘆を抱える被災者やがん患者らに寄り添って心のケアに当たる宗教師だ。
 東日本大震災を機に養成が始まり、柱本さんは、龍

谷大大学院で臨床宗教師研修を受け、東日本大震災の被災地や緩和ケア病棟を訪ねた。だが、一度きりの応対だった実習と、継続して相手と関わる現場の違いは大きかった。
 大切なのは、入居者一人一人の情報だ。さりげなく健康状態を観察し、介護スタッフと連携をとる。会話内容は業務日誌だけでなく、自分が覚えておいて次に生かすため、後でノートに記録しておく。
 とときには入居者たちと一緒にじっとテレビを見続けることもある。「だれにも気を使わず、必要なときに求められる空気のような存在になりたい」。とことん寄り添う覚悟を決めてい

教の信者もいる。柱本さんが担当する希望者対象の法話会も行われている。入居者とショートステイ、デイサービスの利用者(定員計105人)のうち、参加するのは毎回30〜40人ほどという。
 矢次淳一施設長(42)は「職員たちは専門的な介護の勉強をしているが、死生観や心のケアに関することは臨床宗教師の方がくわしい。見習うべき点多い」と話す。